

さざなみ国語教室  
第500号 2023年11月25日  
発行者代表 吉永幸司  
連絡先 大津市柳川2-11-5  
TEL 077-522-1008  
発行所 滋賀児童文化協会  
NPO 現代の教育問題研究所

初志は「心臓のように」  
「さざなみ国語教室」月例会(501回)  
機関紙発行(500回) 吉永 幸司

■「さざなみ国語教室」の発足は1982年4月です。滋賀児童文化協会事務局長高野倅生氏のよびかけで生まれました。会員は滋賀の青年教師が集まって、「授業・子ども。言葉」を大事して実践と研究を大事にする研究集団(サークル)として発足しました、

爾来、2023年11月をもって41年余、月例会501回、機関紙発行500回を迎えました。機関紙創刊号には倉澤栄吉先生から、次のお言葉を、巻頭に載っています。

から、いつまでもいつまでも動いている。教育を考え、言葉を思い、実践に重ねるとき、私は、常に心臓を思い出す。研究をするとき、あまり、仲間がふえすぎない方がよいのかもしれない。心臓は、肥大すると働きはにぶる。永続的な恒常的な実践にふさわしいのは、小さな研究集団であろう。研究が盛んになり大きな集団を形成することは悪いことではない。しかし、組織の中に個性が吸収されてしまう危険も多いのである。

研究をしながら同志が少数で、コツコツと続けていく。心臓のように絶えることなく進めていくのが実践家になさわしい。だから、自然に仲間がふえることは当然だが、仲間をふやそうとする無理な努力は必要だろうか。「近江の子ども」も、高野さんの献身的な努力が実つて今

日の大を成したが、その過程で、組織拡大に無理をしているわけではない。コツコツと続けているうちに、志ある仲間がつき、だんだんとふくらんでいったのである。それは不断の営みに支えられた。不屈の精神に支えられた。(中略)文化と教育は、地味な心臓のように、永続的な、しかし断えることのない働きである。

定期的に仲間うちが、実践を語り合っていく楽しさは、他の何ものにも代えがたい。自らの内にある心臓のたしかさをみんな認めていく喜びなのである。

(文科大学教授)

■「さざなみ国語教室」の初志は「心臓のように」にです。子供に寄り添い、子ども理解を大事にし、確かな学力を習得させる国語科授業の創造です。500回。初志を共有し地道な教育実践を続けていきます。

■高野倅生氏からは、次のお言葉にある「機関紙発行」を条件に応援団長を引き受けていただきました。会場提供だけでなく個人的な相談にものっていただきまし。研究会での議論が伯仲し時間をこえる時には、手作りの食事を用意してくださりました。

公私にわたり支援を賜りました。

た。高野倅生氏のお言葉は次の通りです。

「さざなみ国語教室」によせて 高野 倅生

「さざなみ国語教室」の発足に際し、吉永さんから研究会を創立する話を聞いたとき、もちろん全面的に賛同すると同時に、機関紙発行を条件にしたのである。つまり書くことによつて、研究内容を高め、責任を感じさせる厳しさを加にしたのである。また、締切日を厳守すること。これも、すべて自分のためであることを認識させた。

(「近江の子ども」滋賀児童文化協会事務局長)

■機関紙、「さざなみ国語教室」の誇りは、巻頭に玉稿をいただいていることです。また、様々な立場で応援してください。皆さまからのご指導、ご支援で500回を迎えることができました。ありがとうございました。

■500回を迎えても、長かったという気持ちはありません、昨日に続く今日であり、明日が来るからです。いい授業って何だろうと問いかけながら、心臓の確かさを認め合っていきたいと思えます。

(京都女子大学附属小学校 副校長)  
(さざなみ国語教室 代表)

**深い学びに向かうための  
教室環境**  
井上 滉斗

校内研究会と初任者研修研究授業を兼ねて『ごんぎつね』の研究授業を行った。近江の国語実践研究会でも、本研究の実践発表をさせていただく。ここでは、本研究で私が実践した「読み解く力」を育成するための教室環境について伝えたい。

①「ごんぎつねぎもんコーナー」  
教室の壁面に「ごんぎつねぎもんコーナー」をつくった。ここには、子どもたちが物語から感じた様々な疑問を書いた短冊を並べて掲示した。「ごんぎつねぎもんコーナー」をつくったことで、授業の前に「今日はどの疑問が解決されるかな」と話したり、授業後にも、「私の疑問が今日で解決できた」とうれしそうに話したりする姿が見られた。課題解決に向けて前向きに取り組もうとする主体性を引き出すことにつながった。また、「この疑問は次で解決できそう」と単元の学習を見通して話す様子もあり、単元計画表の代わりとしても活用することができた。

そして、解決した疑問は、「ごんぎつねぎもんかいけつコーナー」に移動し、毎時間の学習の成果をみんなでためた。そうすることで、学級全体として、読み取りの楽しさを味わうこともできた。

「ごんの気持ちの変化を捉えるための学びの足跡」  
「登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わり結びつけて具体的に想像できること」を単元目標の一つとした。その一助とするための手立てとして、二つの学びの足跡の掲示を行った。

一つは、各場面の「ごんや兵十の気持ちと根拠となる叙述を画用紙にまとめて掲示したことだ。場面ごとに挿絵と合わせて掲示することで、ごんの気持ちが少しずつ変化していくことや変化しきつかけを読み解くことにつながった。

もう一つは、各場面の「ごんと兵十のきよりを見る化して掲示したことだ。一場面では、いたずらをするために遠く離れたきよりにたごんが、兵十のおつかあひの死をきつかけに、自分から兵十に歩み寄っていく。このようなごんの気持ちの変化のための支援として効果的だった。

本研究を通して、教室環境がもたらす学習効果について再認識することができた。今後も、より深い学びに向かうために、教室の学習環境の整備に力を入れていきたい。

(豊郷町立日栄小学校)

**さざなみで学んだ三年間**  
川部 長人

さざなみ国語教室で学び始めて、三年が経ちました。あつという間の三年間でしたが、とても濃い時間を過ごさせていたと思います。今回は機関紙が五百号ということもあり、さざなみでの私の学びを振り返ってみたいと思います。

① さざなみ国語教室に入会！  
私がさざなみに入ったきっかけは、教員二年目の時に同じ職場の先生に誘われて参加しました。初めに参加した時には、とても激しい議論がされているという印象でした。話を聞いていると、納得する部分が多く「本物の話し合いだ」と感じました。特に子どもの姿をもとに、話し合われている姿が印象的でした。授業記録を丁寧に取り、子どもの姿で話し合う研究会がとても素敵だと思えます。

② 初提案『モチモチの木』  
入会した年の十一月にさざなみで初提案をすることになりました。当時は小学三年生を担任していたので『モチモチの木』で提案しました。その年は国語科での「活用が研究の主題だったので、子どもたちに「豆太は変わったか、変わっていないか？」ということについて「ご」を使って考えてみることにしました。その時の授業検討会で「人間を百(変わった)か0(変わっていない)か」という二極で考えていいのだろうか。

その間が変わったとも言えるし、変わっていないとも言えるグレーゾーンがあるのが人間ではないか」という意見をもらいました。吉永先生がよく「国語力は人間力」という言葉を言われます。授業検討会での言葉から、私たちは国語を通して人間を育てているのだということ強く感じました。今後人間力を育てる国語授業を目指して、実践を積み重ねていきたいです。

③ 全国国語実践研究大会『名前を見てちょうだい』  
今年度、全国国語実践研究大会で発表する機会をいただきました。今年度は授業記録をとり、「子どもたちは変わったか」ということを考えていきたいと思っ取り組みました。以前、相田萬理子先生(元奈良女子附属小学校)の話や名人と聞かれる相田先生が毎日続けられていたこととして、テープレコーダー授業の音声を取り、帰宅の時に聞き授業の振り返りを行われていたそうです。そうすることで、子どもたちの発言についてもう一度考え直すことができたので、授業力の向上につながったそうです。授業記録やテープレコーダーで、子どもの事実から授業を考えることがとても大切だと感じています。今後も先輩方から学んだことを生かして、子どもたちのためによい授業を目指していきたいです。

(東近江市立能登川南小学校)

1年生のくわしく書く学習  
畑中翔太

学級通信(おひさま)を出し始めて2か月がたち、子どもたちの中から「今日のおひさまは誰の文が載っているのかな。」などの声が聞こえるようになりました。書いたことを載せてもらえたり、みんなに読んでもらったりすることを楽しんでいる姿があります。

10月から、「くわしく書くこと」を書く活動の中心に置き、教師の様子や友だちの様子をよく観察して書いてきました。私が「よくペアの人を見るんだよ。用意はじめ。」と言うと子どもたちは、真剣な表情で友だちを見て、「ノートに鉛筆を走らせていました。」「たくさん書けた」と私の前に行列ができ、読み上げていくと満足した表情を見せてくれます。1年生で習った文字を自分の力で書いたことと、その頑張りを共有したい思いとが学習の原動力になっていると感じます。

校外学習で動物園に行く機会があったので、自分の好きな動物を一つ決めて、色・体の特徴・何をしているのか、という観点で観察して書くことにしました。Bさんの文を紹介します。

「モルモットを見たよ」  
モルモットのいろは、ちやいろと白でした。くろだけの、モルモ

ットもいました。さわると、けがフワフワしていました。ちいさくて、かわいいです。みみは、まるくてちいさいです。足は、ピンクいろでした。足のかたちはほそいゆびが三ぼんありました。くろと、しろのモルモットは足が、くろでした。

あるいたあとは、一かい止まって、おちている、ほそながいくさを、たべていました。たべかたは、口をうごかして、チュチュと、すうようなかんじでたべます。たべおわると、また、あるいていました。あるきかたは、ハイハイしてあるいてました。つぎにやったのは、あるきまわってから、さくをのぼってからおちても、もっかいのぼっておちてをくりかえしてしました。

くわしく書く学習を始めた頃のBさんは、行動を箇条書きで書いていき、量を書くことが好きでした。そのため、文と文に繋がりが感じられない箇所が多くありましたが、文と文に繋がりがあちの文を紹介すると、少しずつ繋がりを意識できるようになりました。

今回Bさんはそれらを活かしながら、色や体や動作をよく見て書くことができました。またモルモットの個体差を、色で比べて書いていて感心しました。

(大津市立田上小学校)

幸せな瞬間  
川端 大介

今年度は、五年生・六年生の体育科授業を担当する体育専科という立場で働いている。国語の授業をする機会がほとんどないが、授業をしているという点で教科を超えて感じる事を綴ろうと思う。

国語にせよ体育にせよ他教科にせよ、授業はトータルな人間形成の場である。授業の充実には、単に知識や技能を高め、伸ばすだけではない。意志も鍛える。楽しさも味わせる。勇気も育てる。優しさも生み出す。生きざまも学ばせる。思考も深める。喜怒哀楽も教える。多岐に渡ることはいくらでもない。

「リレー」の学習では、減速の少ないバトンパスを行う。と指導事項が示されている。単元は5時間間で扱ったのだが、子ども達から歓声が上がった授業風景を記そうと思う。

学級34人を6チームに分けて学習を行った。「スピードを落とさずにバトンパスをするために大切なことは何ですか。」と発問するところから学習は始まった。「渡す手ともらう手を間違えないこと」と「や「ゴー、ハイ!」と大きな声で伝え合うこと」等の答えが返ってきた。大方の知識は身につけていたようだ。技能の面ではまだまだ未熟なことが分かった。

そこで、指導したことは三つである。一つ目は「左手でバトンを渡し、右手でバトンを受ける事。」学級での一斉指導段階では、全員に共通して教えることで評価の指

標がはつきりする。  
二つ目に「バトンを手のひらにグッと押し込む事。」である。渡す方がバトンをもらい手にきちんと渡すまで気を抜かないことである。

三つ目に「全スタート」である。もらい手は、全力で逃げて、「ハイ!」と声が聞こえたら腕を上げる。

この三点を教えて、チームの友達と教師でペアごとに評価をし合いながら学習を進めた。

走ることに苦手な児童Aが得意な友達Bとペアになって学習する場面が起きた。二時間目までは、どうしても、もらい手として走り出すタイミングが合わずに苦労していたが、授業の終わりにAがBへ「うまくなりたいたいから休み時間、一緒に練習してもらえないかな。」と声をかけた。周りの児童はその言葉に驚いていた。Aは外で遊ばずに教室の中でイラストを描いたり色を塗ったりする過ごし方をしていたそうだ。

Bも「いいよ、やろう!」と返事したので、私もすかさずグラウンドへ足を運んだ。何度も「ゴー、ハイ!」と声をかけあい、うまく行った時にハイタッチする姿が見られ、私の心はとても清々しくなった。他に観ていた友達からも「ナイス! よっしゃ!」という友達のがんばりを認め、喜ぶ声が聞こえてきた。

誰かと関わりながら学習を進めていくことができる、できないの壁を友達と一緒に乗り越えていく学習は子ども心にずっと残り続ける。そう感じた幸せな瞬間であった。

(守山市立立入が丘小学校)

「さざなみ」の四十四年を私的にふり返る

森 邦博

出会いを振り返る

本誌「さざなみ国語教室」は、さざなみ国語教室発足の翌月（一九八二年四月）を創刊に、毎月発行を続け今回で五〇〇号を数えることになった。

本会は、高野倅生（滋賀児童文化協会事務局長・「近江の子」とも編集発行者）と吉永幸司（本会主宰）お二人のご尽力によって創立された。私はその二回目の研究会からの参加である。第二回研究会例会の日には教職十年目、彦根市城陽小学校三年目で、六年担任としての新学期四月、第四土曜日であった。

それから四十年を超えて、同人の国語教育実践からの学び続けて、今日を迎えているのであるが、本会の創立の経緯や活動内容等については、常諾眞教氏が「さざなみ国語教室」のHP、「さざなみ資料」に、発足から二〇〇〇年頃までの足取りなどを整理してわかりやすく紹介してくださっている。のでそちらに譲ることにする。同HPには、巻頭言や編集後記とともに、各同人が国語の授業実践を七十行・百行にまとめた記事のバックナンバーを掲載したページも設定してある。「さざなみ国語教

室機関紙既刊号一覽」である。実践の参考資料として是非「一読を！」

実践者としての学び

本会発足頃は、「授業実践の原稿を執筆して提出すること」が高野氏の厳命で、例会までに作成することが不文律になっていた。書けていないときには、書き上げるまで帰れない。今となっては懐かしく思い出であるが…

一方、このことを通じて、実践者としての教訓を得ることができたと思い返すのである。

一つ目は、「教育実践の基礎・基本」への気づきと理解が生まれていったことである。学習前の子どもの姿と学習後の姿とをつないで振り返ることである。つまり、子どもの学習による変容を具体的な姿を通して確かに評価する視点を持つことである。

二つ目は、「テーマを持った授業実践」をすることである。授業実践を通じてどのような言葉の力を、どのような学習過程を構成してつづけるのかを意識することである。授業での手立ての適不適を、実践のテーマと子どもの活動の記録をつなげて考察することである。従って授業を一過性に捉えるのではなく、単元相互の関連を図り、見直しを持って位置づけることや子ども言葉の生活を耕す取組みも含めて、教育実践を俯瞰的に構

想するようになっていったことも挙げられる。

先学からの教えに導かれ

さて、本誌第一号「巻頭言」には倉澤栄吉先生から「寄稿頂いているが、例会の席で直接ご指導とご助言をお聞きできた日のことは特に忘れられない。

同人の西村嘉人さんの実践報告をお聞きになり、ご助言頂いた。

先生は、西村さんの実践に即しながら、教師の多様なあり方を「教師は…である」との見出しで、ディレクター、コンダクター、仏の手を持つ等々…と、具体的に最適な事例を交えてお話ししてくださったが、内容もさることながら、そのときの声の大きさ、響きも場に応じて聴きやすく、平易で明瞭にお教えくださった。若かった私は、必死になってメモしたことを思い出す。

先生のお言葉は、話し言葉でありながら、一文一文がそのまま書き言葉の文章として成り立っている。こんな言葉の使い手になりたくて強く憧れ、こんな言葉の使い手になるような子どもが育つ授業実践者でありたいと、今も思い返す。まだまだ知らぬ私であるが…

四十数年来の同人である私は、今も仲間とともにそして本誌読者皆様とともに、明日の国語教室作りを考え続ける幸せに感謝するのである。

編集後記

十月例会（京都女子大学附属小学校）さんへは、弓削裕之

六年の授業実践について提案しました▼「やまなし（宮沢賢治）」を讀んでの疑問を自分持ち、資料「イハトウヴの夢（畑山博）」やこれまでの宮沢賢治作品の読書の経験を併せて読み解いていくという学習活動の報告でした。指導過程は「一人／グループ／一人」の場面を設定して行いました。▼課題の解決のための一人調べ活動の記録である「考察ノート」例や、テーマごとの「グループの話し合い」を書き起こした紙8頁に及び記録、さらに、文書作成アプリによる各自の課題追究のまとめ例等、それぞれの過程の大変詳しい報告でした。▼そこで「グループの話し合い」の学習場面を、同人が役割分担して音読しての再現に努めながら協議を深めていきました。▼一人での調べ学習が単元の終末の「課題のまとめ」での深まりにつながるような個々やグループに即した適切な指導と評価の大切さ、同時に難しさも感じます。また、学びのプロセスを通じて、学びの成果と課題を次に活かそうとする学び手（学習者）を育てる教科指導の見直し・計画を持つ必要性も浮かんできました。

▼「さざなみ国語教室」は、五〇〇回、五〇一回と、今後も「授業・子ども・言葉」を大事にして「心臓のように」常に新たな気持ちで実践に向かう研究集団として歩んで参ります。読者諸賢のご指導を心より願います。森 邦博